



Title	ポストコロニアル・フォーメーションズ2010 : 序にかえて
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2011, 2010, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポストコロニアル・フォーメーションズ 2010

—序にかえて—

木村 茂雄

1. はじめに

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科主催の「言語文化共同研究プロジェクト」の一環として、この5年間刊行してきた同じタイトルの報告書の続編であり、シリーズとしては6巻目にあたる。またその基盤は、言語文化研究科の教員と大学院生をおもなメンバーとする研究会で、私たちが常日ごろ PCF という略称で呼びならわしている「ポストコロニアル・フォーメーションズ」研究会にある。

近代植民地主義（あるいは植民地主義近代）が投げかける長い影のなかで行われてきた、さまざまな文化の形成（「グローバル・カルチャー」もその例外ではない）について考究すること、またこれらの文化に対する私たちの視座自体をつねに形成し直すこと、それが「ポストコロニアル・フォーメーションズ」という、日本語としてはやや不細工な複数形の命名に込められた「意図」である。この研究会には、制度的なメンバーシップのない言語文化研究科修了生なども重要な会員として参加し、その活動内容を充実させるのに、あるいはそれを複数化するのに大きく貢献している。毎年のことながら、この報告書はその最初の読者として、まずはこれらのメンバーに送り届けたいと思う。

2. PCF の 2010 年度活動報告

PCF 研究会は、ほとんどの場合、論文の輪読会という形をとっている。取り上げられる資料は、広くはポストコロニアル研究と呼べるものが多いが、あえて細分化するなら、帝国主義論、植民地文化論、ポストコロニアル文化論、移民文化論、近代論、グローバリゼーション論などである。対象となる「地域」も、2010 年度の例からランダムにとるなら、アフリカ、インド、カリブ、タイ、ベルギー、イギリス、ルーマニア、アメリカ、日本など、広い範囲に及ぶ。

研究会は大体月1回のペースで、土曜日の午後によく開くことが多い。研究会では基本的に2本の論文を取り上げ、それぞれの担当者が論文の内容をまとめながら、その意義や問題点の指摘を行う。その後フリートークに入るが、これがなかなか過激あるいは刺激的であり、論文を褒めそやすよりも、多くの場合、その欠点、盲点、イデオロギー性などが議論される。ただしこれは、単なる粗探しや日頃のストレス発散ではなく、先行研究に対して

あえて疑問を呈しながら、私たちの批評意識を研ぎ澄まして行く作業であると、少なくとも私は考えている。以下に 2010 年度の PCF の記録を残しておきたい。開催日、論文タイトル、担当者の順で示す。

2010 年

- 5 月 8 日 (土) : Ashcroft, Bill. "Translation and Transformation", *Caliban's Voice: The Transformation of English in Post-Colonial Literatures* (2009), 小杉世 : Geschiere, Peter. "Introduction", *The Perils of Belonging: Autochthony, Citizenship, and Exclusion in Africa & Europe* (2009), 井内千沙.
- 6 月 12 日 (土) : Brathwaite, Kamau. "Missile and Capsule", *Missile and Capsule* (1983), 古東佐知子 : Spivak, Gayatri Chakravorty. "Translating into English", Berman, Sandra & Michael Wood eds. *Nation, Language, and the Ethics of Translation* (2005), 歳岡冨香.
- 7 月 24 日 (土) : Ghosh, Anindita. "Identities Made in Print", Bates, Chrispin ed. *Beyond Representation: Colonial and Postcolonial Construction of Identity* (2006), 伊勢芳夫: アンソニー・ギデンズ / 渡辺總子『日本の新たな「第三の道」』 (2009), 村上八重子.
- 9 月 11 日 (土) : ピエール・ブルデュー&ロイック・ヴァカン『国家の神秘：ブルデューと民主主義の政治』第 9 章「帝国主義的理性の狡知」(2009), 依岡宏子: Hesse, Barnor. "Diasporicity: Black Britain's Post-Colonial Formations", *Un/Settled Multiculturalisms: Diasporas, Entanglements, 'Transruptions'* (2000), 稲垣健志.
- 10 月 2 日 (土) : McLeod, John. "Introduction", *Postcolonial London: Rewriting the Metropolis* (2004), 中村未樹 : Dimock, Wai Chee. "Introduction", *Shades of the Planet: American Literature as World Literature* (2007), 松本ユキ.
- 11 月 13 日 (土) : Spivak, Gayatri Chakravorty. "1994: Will Postcolonialism Travel?," *Other Asias* (2008), 木村茂雄 : Butler, Judith. "The Body Politics of Julia Kristeva" (1989), 杉浦清文.

2011 年

- 1 月 8 日 (土) : Raymond Williams の TV ドキュメンタリー, 山田雄三: Ramaswamy Sumathi. "Between Men, Map, and Mother", *The Goddess and the Nation: Mapping Mother India* (2010), 加瀬佳代子.
- 2 月 19 日 (土) : Suaysuwan & Kaptizke. "Thai English Language Textbooks, 1960-2000", *Struggles over Difference: Curriculum, Texts, and Pedagogy in the Asia-Pacific* (2005), 小杉世 : Comaroff, Jean. "The End of History, Again?: Pursuing the Past in the Postcolony", *Postcolonial Studies and Beyond* (2005), 井内千沙.
- 3 月 20 日 (日) : Bono, James J. et al. "Future, Heteronomy, Invention", *A Time for Humanities: Futurity and the Limits of Autonomy* (2008) (大貫隆史 : 関西学院大から特別参加) : 「現代

イギリスにおける「人種」「移民」——the Institute of Race Relations の「設立」から「乗っ取り」までを追う——（稲垣健志：準備中の博士論文からの発表）

3. コロニアル / ポストコロニアル / グローバル——『ノストローモ』と『喪失の遺産』

PCF は以上のように、個々のメンバーの関心を尊重しながらも、共通の連関した問題群について考究しようと努めてきた。この報告書に収められた論考も、題材からいえば多種多様だが、それぞれの論考のどこかには PCF 研究会から得られた知見や、そこで鍛えられた批評意識が活かされていることは間違いない。

そこに共通する関心のひとつを私なりに抽出するなら、それは、コロニアル / ポストコロニアル / グローバルという、近・現代世界を覆ってきた政治力や世界観、およびそのなかで実践されてきた文化生産の「継起的」かつ「同期的」な展開という関心のように思われる。つまり、これらの政治力や世界観の「段階」を単に継的に捉え、各種の文化生産の「古さ」や「新しさ」を論じるのではなく、これらの要素が特定の時代や場所においてさまざまな形で絡み合いながら、文化の生産にかかわってきたことを示すことである。「時期的」(epochal) な文化の捉え方と歴史的 (historical) なそれとの区別したウィリアムズ、あるいは、「残余的」(residual) 「支配的」(dominant) 「萌芽的」(emergent) な要素の同期的な混在を、文化変容の動力とみた彼の文化モデルを思い出してもいいかもしれない。¹

たとえば、20 世紀初頭の『ノストローモ』(Joseph Conrad, *Nostromo*, 1904) と、21 世紀初頭のキラン・デサイの『喪失の遺産』(Kiran Desai, *The Inheritance of Loss*, 2006)。『ノストローモ』における植民地性、ポストコロニアル性、グローバル性については別稿でやや詳しく論じたことがあるので、² ここではその概略を示すにとどめたい。この小説で描かれた南米の架空の国コスタグアナ共和国における分離独立の動乱は、いくつかの素材研究によれば 1890 年のことと推定されるが、それは「闇の奥」(1902) の下敷きになった、コンラッドのアフリカ体験と時期的には完全に重なり合っている。しかし、これらのテキストにおける「植民地性」がいかに異なっているかは、その読者にはあまりにも明らかだろう。コスタグアナはそもそも、宗主国スペインから「独立」して 70 年近くを経た、紛れもない「ポストコロニアル国家」である。またここでは、「闇の奥」のそれとはまったく異なる歴史状況から、さまざまな「人種」や「民族」、その混血、労働移民などからなる多民族社会がすでに成立している。そこに働いている国際的な政治力も、「闇の奥」にみられる 19 世紀型の古典的な植民地支配より、20 世紀後半以降のポストコロニアル国家に対する新植民地主義的な支配や、アメリカの企業資本と結びついた、経済的・政治的・文化的・宗教的グローバリズムを予見させる要素を多分に含んでいる。

『ノストローモ』の方が「闇の奥」よりも「進んでいる」というわけではない。重要な

¹ Raymond Williams, *Marxism and Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1977), pp. 121-27.

² 木村茂雄「『ノストローモ』点描——「ポストコロニアル」の視点を中心に——」『英米文学の可能性：玉井暉教授退職記念論文集』英宝社、2010 年）

のは、この2つのテキストを合わせ読むとき、同じ「1890年」の世界でも、コロニアル / ポストコロニアル / グローバルの力が、その場所の違いによって根本的な差異を孕みつつ、同期的・非同期的に展開していることが私たちにも雄弁に伝えられるということだ。

『喪失の遺産』(2006年のブッカー賞受賞作)は、ほぼ100年後の1986年をめぐる小説で、おもな場所は、ヒマラヤ山脈の高峰カンチェンジュンガを遠く仰ぐ町カリンボンである。一見インドの「辺境」の地のようなのだが、古くから「ネパール、イギリス、チベット、インド、シッキム、ブータンとの間で多くの争い、裏切り、取引が行われてきた」場所でもある。³ 物語は、この土地の多数派住民でありながら周辺化されてきたゴルカ人(グルカ兵で有名なゴルカ人はその英語化)によるゴルカ分離主義運動を軸に展開して行く。広範な時空間を扱い、かつ非常に密度の高いこの作品を限られたスペースで紹介することは不可能だが、基本的に重要なことは、そのヴィジョンもまた、コロニアル / ポストコロニアル / グローバルの力が、ある特定の時間と場所において、同期的・非同期的に働き、個々の人間の現在を揺り動かしているという歴史認識・世界認識にあるという点である。

作品のヒロインで、孤児の少女サイ(Sai)は、植民地主義の残余といえる祖父、植民地時代にイギリス留学を経て植民地政府で地位を得たものの、その当時からネガティブな「物まね人間」の意識に苛まれ、イギリスからもインドからも疎外されてしまった「判事」と、スコットランド人の建築家の手になる古い屋敷に暮らしている。やや撞着語法的な『喪失の遺産』(*The Inheritance of Loss*)というタイトルは多義的だが、ひとつには、植民地主義による「喪失」が、ポストコロニアル時代のサイにも、負の(場合によっては、正の?)遺産として引き継がれていることを暗示している。そんなサイに、ある日、ゴルカ人青年のギアン(Gyan)が家庭教師として訪れ、2人の恋物語が始まる。しかし、彼がゴルカ分離主義運動に否応なく巻き込まれるにつれ、2人の関係にも暗雲が立ち込めて行く。

もうひとつの重要なのは、「判事」の料理人の息子ビジュ(Biju)が、不法労働移民として、ニューヨークのいくつかのレストランの台所を転々と渡り歩く物語である。この部分は、近年充実が目覚ましい「移民小説」のジャンルに位置づけることもできるだろう。また、このジャンルの隆盛や移民研究の活発化自体が、グローバリゼーション時代における大規模な人の「移動」に触発されたものであることはいうまでもない。ただし、「移動」に関するこれら多くの言説がその意味を最終的には肯定的に捉えがちなのに対して、この作品は、かならずしもその傾向に同調しない。文字どおりにも比喩的にも「ドアを開ける天才」(78)とされるザンジバルからの不法移民サイド・サイド(Saeed Saeed)、「俺は第1にムスリム、次にザンジバル人、その上でアメリカ人だ」(136)と公言し、そのアイデンティティの「矛盾」を見事なくらい感じさせない彼の存在には、キラン・デサイのコメディの筆の冴えも相まって、「ハイブリッド」なアイデンティティの可能性が十分に表

³ Kiran Desai, *The Inheritance of Loss* (Penguin Books, 2006), p. 9. 以下、この作品からの引用ページ数は本文中に示す。

現されていることはたしかだ。彼は実際、ビジュにとっても一種のロール・モデルともなるが、しかしビジュ自身は、アメリカ社会を彼のように軽々と生きて行くことはできない。それは多分、多くの移民たちにとっての現実でもあるだろう。

ビジュは結局、ゴルカ分離主義運動の騒乱の渦中にある父のもとに帰ることを決意する。格安航空券を手に入れ、「おんぼろバス」のような「湾岸航空」(Gulf Air)の飛行機に乗り込み、「ニューヨーク、ロンドン、フランクフルト、アブダビ、ドバイ、バーレーン、カラチ、デリー、カルカッタ」と経由しながら、故郷に向かう。グローバリゼーション時代を象徴する空の旅にも、植民地主義の残滓がつきまとう。ロンドンのヒースロー空港で彼が着陸するのも、「ヨーロッパ人や北米人が行き交う場所から程遠い」、「空港の外れ」の「第三世界の航空便」のための場所である。そこは「ローバリゼーションの新しい時代のために改修されることなく、植民地支配 (colonization) の古い時代の名残をとどめていた」と語り手は述べる (285-6)。

しかしながら、ビジュが最後に辿りつく「故郷」も、彼の移動前の故郷と同じものであり得ないことは明らかだ。また、ビジュの到着の瞬間に重ね合わせて、サイの移動の決意が語られている点も意味深く、劇的である (323)。サイの祖父のコロニアルな旅、ビジュのポストコロニアルあるいはグローバルな旅、これらの旅の反復と変容がそこには暗示されているからだ。「喪失の遺産」の継承はまだ終わらない。

『ノストローモ』は、スラコ地方の分離独立革命から 14 年後の 1904 年に出版されたが、『喪失の遺産』もまた、ゴルカ分離主義運動の 20 年後の 2006 年に出版されている。その意味でそれは一種の「歴史小説」でもある。グローバリゼーション時代の本格的な幕開けとして、ベルリンの壁崩壊の 1989 年がしばしば言及され、また実際、これを機にグローバリゼーション論や移民研究が活性化したことを踏まえるなら、この作品におけるマイノリティ・ナショナリズムやニューヨークの移民社会の意味づけは、21 世紀から 1986 年を振り返った、やや時代錯誤的なものに思われるかもしれない。しかし、1986 年に生きていた人間がグローバリゼーションの力を受けていなかったわけではないし、植民地主義の残余的な力から自由であったはずもないだろう。むしろ、コロニアルの過去とポストコロニアルの現在、そしてグローバルの未来が、『ノストローモ』の場合とはまったく違った形で絡み合い、インドの「田舎」とアメリカの「都会」においてもまったく異なった制約や可能性を生み出しながら、1986 年という時点に折り重なって生起している状況を描き切った点に、「歴史小説」としてのこの作品の最大の功績があるといえるだろう。

4. ポストコロニアル・フォーメーションズ VI

寄り道が長くなったが、この報告書に収められた 7 編の論考を最後に駆け足で紹介しておきたい。

山田雄三の「始めることの困難と展望」は、エドワード・サイード自身の「始まり」の時点にさかのぼり、(旧) 植民地の人間が「起源」の呪縛を逃れつつ「始まり」を意図する

可能性についてのサイードの「展望」をそこに見出す。そして、同時期のフーコーとは異なり、「意図」や「エイジェンシー」にこだわり続けたサイードとウィリアムズの「モダニズム」を指摘する。伊勢芳夫の「ミシェル・フーコー再考と敷衍」は、一見これとは正反対の立場を取るかのようである。サイードの『オリエンタリズム』が数々の言説の共犯関係を強調するあまり、西洋の白人優位主義を過度に強調している一方、フーコーの言説分析は、下位言説の「影響・反発・乖離の関係」を可視化することを可能にしていると論じるからだ。しかし、ここで主張されているのも、文化言説を複数的そして動的に捉えることの重要性であるといえるだろう。

中村未樹の「Ends を離れて」、村上八重子の「ラフィク・シャミと「移動のドイツ語文学」」、松本ユキの「*East Goes West*における東洋の西洋化」、Sachiko Koto (古東佐知子)の“African-American Gangster Films and Literature”は、みなそれぞれに、現代世界における移民や移動の問題を扱っている。

中村論文は、“Ends”とも呼ばれるイギリスの公営住宅での現代のブラック・ブリティッシュの生活を描いた3編の演劇作品を分析し、ある意味で残余的といえる「リアリズム」様式が、21世紀のドラマにおいて新しい可能性を獲得しつつあることを示唆する。村上論文は、シリア生まれの現代のドイツ語作家ラフィク・シャミが、おとぎ話や寓話の形式をとった初期のドイツ語作品において、「移住」や「外国人労働者」の問題をいかに柔軟に表現しているかを紹介・分析する。

松本論文は一転して、日本の植民地支配下の朝鮮からアメリカに移住した Younghill Kang の自伝小説を中心に、日本による植民地主義と朝鮮の民族主義、イギリスとアメリカの2つの帝国の間で、あえて「個人」として生きようとした朝鮮人「エグザイル」の萌芽的な物語を辿る。古東論文は、ほぼ同時期のニューヨークで黒人作家のクロード・マッケイやリチャード・ライトが著した「ギャング小説」から、1970年代に流行した「ギャング映画」までを跡づけ、都市の「ゲットー」という現代世界の「周縁」(margin)における文化生産の意味に迫って行く。

Sei Kosugi (小杉世) の “Hauora Māori: Indigenous Language Education, Environment and the Production of Literature” では、マオリ文化における言語、健康医療、文学との有機的な関係という、ややユートピア的なテーマが敷衍されるが、最後には打って変わって、21世紀の2編のマオリ演劇における「ディストピア」のヴィジョンが提示される。そのひとつが、ウェリントン空港の国際線出発ロビーを舞台としているのも意味深長なことに思える。

以上のように、この報告書の各論考においても、世界のさまざまな場所や時間においてせめぎ合うコロニアル / ポストコロニアル / グローバルの様相が追究されているといえる。このような複数の文化形成の動態を引き続き追究して行くことを約束して、本報告書の序にかえたい。